

令和 元年 6 月 10 日現在

機関番号：10101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02479

研究課題名(和文) 国家の罪から個人の罪へ マーク・トウェインの創作原理の解明

研究課題名(英文) A Study of the Principles of Creation in Mark Twain's Fiction

研究代表者

竹内 康浩 (Takeuchi, Yasuhiro)

北海道大学・文学研究科・教授

研究者番号：40251376

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：マーク・トウェインの『ハuckleベリーフィンの冒険』が元々は主人公の父親の殺人事件を巡る推理小説であったという作家の計画を研究することで、作家が父殺しのテーマに魅了されていたことを明らかにし、さらに作家の原罪ともいえるこの主題が、後には国家の原罪、すなわちアメリカにおける奴隷制の主題にすり替えられることを明らかにした。これにより、現在、人種問題に偏っているトウェイン研究を、作家が抱えていた個人的な罪の意識の探求に向かうよう、新たな問題提議を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、トウェインの探偵小説群において、犯人像が非常にしばしば混血の息子であることを発見した。つまり、元来、トウェイン作品における人種問題のテーマは、作家の社会的・歴史的関心から生じていると考えられてきたが、本研究により、その人種問題でさえ、その根底には父と子の複雑な血縁という個人的な問題が存在していたことが明らかになったのである。この発見は、トウェイン研究をさらに作家のトラウマ研究へと向かわせる端緒となるであろう。また、一般の読者にとっても、社会問題よりも作家の個人的体験が文学を生み出すことを再認識させるものとなるはずである。

研究成果の概要(英文)：Studying the presumptive original design of Mark Twain's The Adventures of Huckleberry Finn as a murder mystery surrounding the death of Huck's father, my research has revealed that the author was obsessed with the theme of patricide, an obsession that originates the sense of guilt he felt at the death of his father, and that this original sin of the author was later to be replaced with a public forbidden fruit--slavery, the nation's original sin. This thus calls for a shift of focus in the criticism of the novel: from the presently dominant race issues associated with Jim, the runaway slave, to the patricidal theme related to Huck's father; or, put another way, from the nation's public, overt past crime against the slaves to the author's private, secret crime against his father.

研究分野：アメリカ文学

キーワード：トラウマ 混血 人種 探偵小説 エディプス

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

## 1. 研究開始当初の背景

これまで『ハックルベリー・フィンの冒険』は、人種問題を巡る物語として読まれてきた。特にアメリカ本国では、黒人差別は社会に根深く残る深刻な問題であるため、批評家たちもそのような観点からこの小説を議論・研究してきた。そのなかで議論の的となっていたのが小説の結末部分である。逃亡奴隷ジムを解放する旅でもあったはずなのだが、物語の結末部分では、主人公とその友人トム・ソーヤがジムに対して奇妙なほど差別的で、ジムの救出自体が少年たちの遊戯の対象に成り下がっている。これでは、人種差別批判の書に相応しくない。そこで、Shelley Fishkin や Forrest Robinson ら著名なトウェイン研究者が展開したのは、この部分が黒人の「再解放」を描いているのだ、という議論だった。南北戦争を機に制度上は自由となった奴隷たちが、現実には戦後もまだ差別を受けており、そのために再度「解放」される必要があるのであり、小説結末で描かれる一見不必要な遊戯に過ぎないジムの救出は、そのことを示唆しているのだ、というのである。現在、定説とも言えるそのような議論は、しかしながら、大きな欠陥を抱えている。なぜ少年たちが「再解放」を遊びとして行っているのかが説明できないのである。結末にただよう一貫した喜劇性は、奴隷再解放という深刻なテーマにそぐわない。

研究代表者は、すでにこの小説が抱えている問題が、実父が死んだ際に作家が抱いた罪悪感ではないか、という仮説を単著論文“Twain’s Trauma and the Unresolved Murder of Huckleberry Finn’s Father” (Takeuchi, *Literary Imagination* 2013) や、“Tracking Twain: The Unfulfilled Pursuit in Mark Twain’s Detective Fiction” (Takeuchi, *American Literary Realism* 2015) で新たに提唱している。トウェインにとって実父の死が自らの罪の意識と深く関わるものだったからこそ、元々『ハックルベリー・フィンの冒険』は主人公の父の死を巡る推理小説として書き始められたのであり、そして作家の罪の意識故にその計画が断念された、という仮説である。

この新たな仮説を、これまで支配的だった結末を巡る議論に接続したい。すると、人種問題の視点からでは解明できなかった結末の喜劇的性格は、作家のトラウマに対する一つの防衛機制として理解出来るのではないか。トラウマへの接近を断念した作家が、その罪深い企てを覆い隠すために、過剰なほどの喜劇的要素を結末に書き込んだようにもみえるのである。トウェインの実父に対する罪の意識を議論の中心に据えることで、これまでの人種問題に偏ったトウェイン研究に新たに重要な方向性を与えられるはずだ、という発想が本研究の出発点である。

## 2. 研究の目的

### (1) 概要

アメリカ文学の金字塔、マーク・トウェイン著『ハックルベリー・フィンの冒険』(1885) は、本当に人種差別を巡る物語なのか。逃亡奴隷ジムと主人公の旅は、白人少年が黒人への差別を克服する成長物語として評価される一方、黒人に差別的な主人公の言葉や態度も散見されることから、本書は反差別なのか差別的なのかと議論が続いてきた。しかし、これまでの人種を巡る議論の枠組み自体に問題はないのか。そのような根本的な疑問が本研究の出発点である。本研究は、黒人差別という国家的・社会的な問題より、むしろ作家の個人的な問題を掘り下げる。そして、父の死こそが作家のトラウマであることを明確にすることを目的とした。

### (2) 意義

本研究の元になった着想、すなわち『ハックルベリー・フィンの冒険』を推理小説として読み解き、主人公の父の殺人事件の解決に必要な伏線がすでに作品に書き込まれていることを発見した業績 (Takeuchi, *Literary Imagination* 2013) は、これまでのトウェイン研究者たちの意表をつくものだった。その重要性は、同論文の掲載誌がオックスフォード・ジャーナルの一つであることから明らかだろう。またトウェインの未完結の推理小説群を論じた研究代表者の論文 (Takeuchi, *American Literary Realism* 2015) も、19世紀アメリカ文学研究において最も権威ある学術誌の一つに掲載が決まっている。書かれたものだけでなく、書かれる予定だったもの、あるいは、書こうとして書けなかったものに注目する研究手法が評価されたといえるだろう。加えて、本研究の根幹となった研究代表者のテキスト読解能力はこれまでも高く評価されており、J.D.サリンジャーに関する竹内の研究は、米国の高名な批評家ハロルド・ブルームによる論文選集にも採録されている (Takeuchi 2009)。研究代表者のトウェインに関する研究も、海外のみならず、日本においてはいち早く新潮選書の一冊として刊行されている (竹内 2015)。

このように国内外で評価された斬新な着想およびテキスト読解の手法に基づいて行われる本研究は、多くの研究者が注目するアメリカの国民作家の最大の傑作を研究対象に据え、これまでの批評の枠組みを、人種問題から作家の個人的なトラウマへと転換しようという野心的な試みであると言える。また、研究成果を論文だけでなく、米国において著書として刊行することにより、『ハックルベリー・フィンの冒険』が、トラウマを抱えた作家の精神的苦闘の記録であるという新しい理解を一般読者にも広めることまで、本研究の目的には含まれる。

## 3. 研究の方法

本研究は、トラウマという作家本人が「語り難いもの」を研究対象としているため、未完の

作品のみならず、刊行に至らなかった膨大な草稿、あるいは原稿の余白の書き込みを読み解く作業を行うと同時に、主要な作品から埋もれた作品群まで丹念な精読を行うことが、本研究の主な方法となった。

具体的には、申請者のこれまでの研究で明らかになった重要な単語（現時点で判明している作家のトラウマに関わるとされる単語としては“autopsy”“dissection”“corpse”“Eddy”“grave”“digging”などがある）の周辺で、物語がどのような展開をみせているかに注目する。

このような方法を用いることで、作品中に描かれつつも事件の解決に直接役立つことのない先述の奇妙な足跡群が、どのような意味を持っているのか、という申請者が提起した問題(Takeuchi, *American Literary Realism* 2015)が、最終的に解決されることが期待された。また、より重要なことだが、『ハックルベリー・フィンの冒険』が完成に至る過程の全容を明らかにすることを目的とした。トウェインは同書の完成に9年を費やし、その中で2度の長期にわたる執筆の中断を経験している。トウェインのペンを止めてしまった原因に関する定説は、もっぱら作家の創作意欲の減衰や、同時に進行していた作品群による執筆時間の欠乏に帰するものだが、申請者はそれがトラウマに関わるものだと考えている。しかし、申請者の単著書籍『謎とき「ハックルベリー・フィンの冒険」』（新潮社 2015年）は、第一回目の中断(1876年から1880年)について詳細な仮説を提唱するにとどまっている。今回の研究では、第二回目の中断(1880年から1883年)についても、トウェインのトラウマがどのように作用し、執筆を再開するにあたってトウェインがどのような隠蔽や抑制を必要としていたかが明らかになるはずである。言い換えれば、そのような複雑な創作過程を生じさせることになった作家の個人的体験(トラウマ)こそが、作家の創作原理の根幹をなしているといえるだろう。

以上、予測される通りの結果になれば、これまでのトウェイン研究に新たに重要な視点を加えることになる。繰り返せば、人種問題という合衆国の国家的な「罪」の観点からの検討がもっぱらであったこれまでの研究動向に、作家が父の死に対して密かに抱いていた個人的な「罪」の意識という視点がもたらされるのである。それはこれからのトウェイン研究の方向を一変させる可能性を秘めていると思われるため、このような研究方法を採用することとした。

#### 4. 研究成果

マーク・トウェインの『ハックルベリー・フィンの冒険』が元々は主人公の父親の殺人事件を巡る推理小説であったという作家の計画を丹念に跡づけながら研究することで、作家の執筆が順調に進んだ時期と、中断した時期に、一つのパターンがあることが解明された。

すなわち、1876年に執筆が開始され、その後数週間にわたり執筆が継続された後、同年秋には執筆が中断する。これは、主人公の父親を殺した犯人を明らかにすべきか否かで作家が悩んだからであった。それは同時に、自らが実父の死に対して抱えていた罪の意識にいかに対処するか、という問題でもあった。その問題を解決するには、その後のヨーロッパ旅行において、自らの罪の意識を沈める時期を必要とした。そして、自らの良心の活動を静めることができた作家が確信したとき、作家は執筆を再開したのであった。

それが1880年のことである。しかし、数ヶ月後、再び執筆が中断してしまう。それは、主人公の父親に似たもう一人の父親が殺された場面であった。ただし、今回は第一回目の中断時と違い、殺人犯の正体が明らかだった。だからこそ、父殺しの犯人をどうするか、という問題に、より直接的な形で作家は直面することになった。それゆえ、前回同様、作家は執筆を中断することになったのである。

三度執筆が開始された1883年、トウェインは前回同様、自らの罪の意識を刺激する良心の活動を静めることになる。執筆を再開した直後、罪人を告発する良心の権化として、殺人者をリンチにかけようとする群衆を登場させ、彼らに対して殺人者が演説を行うことにより、群衆を圧倒させたのである。このような「良心」の敗北は、すなわち、トウェインの良心の沈黙化を意味しており、これこそが小説の執筆を再開するために必要な作業だったのである。

このように、トウェインの執筆の3度にわたる開始・再開と、その中断には、明確なパターンがあったことが解明された。

このことは、作家がアンビバレンツを抱えながら、父殺しのテーマに魅了されていたことを示している。しかし同時に、そのような難しいテーマに魅了されていたが故に、執筆は困難を極めたと言える。

この困難さを克服するために作家が考え出したのが、罪のすり替えである。すなわち、作家の原罪ともいえる父殺しの主題が、後には国家の原罪、すなわちアメリカにおける奴隷制の主題にすり替えられたのであり、本研究はその詳細を明らかにした。具体的には、これまで様々な議論されてきた『ハックルベリー・フィンの冒険』の結末部分において、特にそのようなすり替えが起きていることを示した。

また、トウェインの後期探偵小説『二連装式探偵物語』と『うすのろウィルソン』やその他の埋もれた探偵小説（未完作品を含む）において、トウェインにとって推理小説という分野が父殺しの主題と深く結びついていることを明らかにした。

ただし、それ以上に重要なのは、本研究において、トウェインが描く犯人像が非常にしばし

ば混血であることが明らかになったことである。

『うすのろウィルソン』において、殺人犯が黒人と白人の混血であることの意義は、これまでアメリカ社会における人種差別問題を参照しながら論じられてきた。しかし、『二連装式探偵物語』における犯人像は、人間と犬の混血なのである。つまり、このことは、黒人奴隷に対する人種差別がトウェインにとって主要な問題であったのではなく、むしろ、混血問題そのものが主要な主題だったことを強く示唆する。

この発見を踏まえて、トウェインの主要作品の一つである『トム・ソーヤの冒険』を振り返れば、そこにも殺人犯として白人とインディアンとの混血の人物が描かれていたことの重要性が浮かび上がってくる。

この着想により、本研究は、トウェインがその混血の殺人犯を描くに当たり、ミノタウロス神話、すなわち神話上の半獣半人の怪物と、それを退治したテセウスを下敷きにしていたことを発見した。テセウスが迷路の中に潜む混血の者を征服したように、トウェインの主人公であるトム・ソーヤもまた、迷路と同値である洞窟に潜む混血殺人犯を征服していたのである。そして、その冒険の後に、トムが新たな父親的人物から是認される、というプロットは、洞窟での冒険の奥底に、親子問題が潜んでいたことをも示唆している。

これら一連の発見は、重要な成果であったと思われる。なぜなら、混血の息子が父に対する殺意を抱くという作家独特のパターン、あるいは、トムがテセウスのように洞窟・迷路の謎を解くと同時に混血の殺人者を征服することで新たな父親を獲得するという展開は、人種問題そのものが父の死に関する作家の問題意識に直接結びついていることを示唆しているからである。つまり、元来、トウェイン作品における人種問題のテーマは、作家の社会的・歴史的関心から生じていると考えられてきたが、その人種問題でさえ、その根底には父と子の複雑な血縁という問題が存在していたことが明らかになったのである。これは、研究開始前には想定していなかった成果であった。

この発見により、現在、人種問題を社会的文脈で解釈しているトウェイン研究を、作家が抱えていた個人的な罪の意識の探求に向かわせる、新たな問題提議を行うことが可能となった。

なお、これらの発見は、ピア・レビューを経て、2018年6月に単著、*Mark X: Who Killed Huck Finn's Father?* (New York: Routledge)として発表され、2019年1月には、アメリカ探偵作家クラブが主催する米国ミステリー界で最も権威のある文学賞、エドガー賞の批評・評伝部門にノミネートされるという高い評価を受けた。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計0件)

〔図書〕(計1件)

竹内 康浩、Routledge、*Mark X: Who Killed Huck Finn's Father?* 2018、238

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年：

国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

## 6 . 研究組織

### (1)研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号（8桁）：

### (2)研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。